

柿沼陽平著

## 『中国古代の貨幣』

——お金をめぐる人びとと暮らし——

(歴史文化ライブラリー 395)

吉川弘文館 二〇一五・二刊  
四六 一三四頁 一七〇〇円

本書は中国古代経済史の研究者である著者の二冊目の単著で、前著『中国古代貨幣経済史研究』(汲古書院、二〇一一年)の主要部分を一般読者向けに平易に書き改め、更に新たな論考を加えたものである。全体はプロローグ・エピローグを含む五章の論考と後書きによって構成されている。

プロローグ「中国古代貨幣の世界へ」では、「人間はいつから貨幣に人生を左右されるような生活に足を踏み入れてしまったのか」として、古代貨幣という問題を現代に続く問題として位置付けており、それが本著全体を貫く縦糸となっている。

続く「貨幣と国家」の章は、貨幣の源流と、交易の発生と発達、半両銭の登場と国家との関係について論述する。こうした半両銭体制が「国家の意向」によって施行されたという、従来の「銭」国家的決済手段論を継承しながらも、漢に至って民間鑄造による粗悪銭や盗鑄銭によって銭文と実質重量が乖離したことを指摘し、国家が銭の実質重量を重んじる「民間の慣習」に迎合する形で新たな銭を制定したとして、当時の貨幣の展開を国家と民間と

の関係から読み解いている。

次章「競合する貨幣たち」では、固定官価・平価・実勢価格という物価の三層構造と、黄金・銭・布帛という貨幣の共存とを挙げ、当時の銭の価値が必ずしも金本位・布本位制等の制度によって保証されていた訳ではなかったことを指摘する。また、異なる経済圏の並存や市場の階層性、それぞれの貨幣流通についても論及している。

そして、書き下ろし部分である「人びとをつなぐ貨幣」の章では、文献や出土史料から当時の庶民の生活実態を分析し、彼らが「貨幣」を如何に捉え、それが生活の場において如何に機能していたかを論述する。貨幣は、生活の場においてコミュニケーションツールとしても利用され、独自の社会的機能も有していたという。

最後にエピローグ「中国古代貨幣の特殊性」では、戦国秦漢期には貨幣の流通経路・流通量に地域的偏りが存在し、統一帝国の出現が「貨幣統一」の示現を意味しなかったことを指摘する。著者は貨幣が未統一であるという、この貨幣経済の多様性こそが漢帝国を維持せしめた一因であったとしており、結尾には貨幣から漢帝国の興亡を読み解こうとする大きな展望が示されている。

本書は「貨幣」を問題にしながらも、それを明確には定義しておらず、しかしそれが却って、我々が日常的感觉から貨幣を想像することを容易にし、貨幣の持つ多元的性質を制約なく理解することを可能にしているといえよう。また、著者は「貨幣」は単なる経済道具ではなく、その流通は社会・制度・習俗に連動すると

して幅広い学問領域を周覽し、マクロな視点から中国古代貨幣史をより具体的・立体的に描出している。古代と現代、経済と社会・国家とを切り離して対立的に捉えるのではなく、それぞれの視点から多面的に貨幣という存在を捉え、また、貨幣からそれらのあり方を捉え直そうとしているのである。本書は中国古代史・経済史の分野に限らず、多くの歴史研究者に読んで頂きたい一冊である。

(佐々木満実)